

平成29年度島根県立大学出雲キャンパス 客員教授特別講義 — 研究が国境を越えるとき —

舟島なをみ

新潟県立看護大学 研究科長 教授

島根県立大学出雲キャンパスにおいて舟島客員教授の特別講義を、平成29年10月20日(金)に開催しました。

ここでは、その特別講演の概要を紹介します。



*なぜ、看護教育学なのか

受講学生から研究のイメージを引き出しつつ、大学はなぜ研究を教えるのか、そして舟島先生の専門である「看護教育学」について、次の説明がありました。

- 「看護教育学」は、看護基礎教育、看護卒後教育、看護継続教育という、3つの領域の研究をします。
- 看護基礎教育とは、看護師国家試験受験資格の取得に結びつく看護系大学、短期大学、専門学校での教育です。
- 看護卒後教育とは大学院の教育を意味します。
- 看護継続教育は既に免許を持ち、保健師、助産師、看護師、そして教員として働いている

人たちの教育です。

- 看護は学的基盤のある専門職であり、資格取得後も学習が必要です。大学院への進学もその一つです。

看護基礎教育終了後、看護卒後教育や看護継続教育の必要性、そして、舟島先生の専門である「看護教育学」との関係が理解できました。

*看護教育・研究をしていく過程で大事にしていること

舟島先生は看護教育学を専門に、千葉大学で24年間教育・研究をしてこられました。その過程で大事にしておられる3点について、次の講演がありました。

1. あるがままの状態から目をそらすことなく、その本質を取り出すための研究を行う

現在、看護師の中で問題になっていることの一つに、医療事故があります。病院はどこも忙しく、そのような中で働く看護師は個々に様々な医療事故防止対策を講じていますが、それらは明らかにされていませんでした。看護師個々が実際に講じている医療事故防止対策、すなわちあるがままの状態を明らかにし、それらを医療事故防止のための知識として活用することにより、患者への安全な医療の提供に一步近づけるのではないかと思います。

医療事故の状況から目を背けることなくあるがままの状態から本質を取り出し、それを教育と実践に活用することが重要です。

2. 先人の知見に最大限学ぶ

看護は職業として長い歴史を持っています。そして、世界中どの国にも人々の健康のことを一生懸命考え、仕事をしている看護師がいます。私は、先人の知見に最大限学び、その上で、まだ研究がされていないところ、足りないところを研究してきました。

このような観点からも文献を検索し、丁寧に読んでいくことは大変重要なことです。私は先人の知見に最大限学ぶことを、24年間、一生懸命教えてきました。それが、研究だけでなく、職業上、直面するさまざまな問題を科学的に解決することにもつながっていくと信じています。

問題を科学的に解決するためには、まず、その問題に関連する研究がなされているかどうか、その視点から始まるのです。それはすなわち先人の知見に最大限学ぶということです。

3. 活用可能な研究成果を産出する

これから皆さんは研究方法を学び、4年生になると実際に研究をして、卒業論文を作成します。研究は、本箱にしまっておいては何の役にも立ちません。

看護は実践の科学ですので、活用可能な研究成果を産出する、活用できるところまで研究を

継続する必要があります。

***真摯に取り組んできた看護研究、その先に**

舟島先生は、前述の3点を大切にしながら、さまざまな研究を行ってこられました。その先がどうなったのか、次の講演がありました。

■前述の3点を大切にしながら、私はさまざまな研究を行いました。そして、その成果として著書「看護教育学研究」、「質的研究への挑戦」、「看護実践のための測定用具ファイル」、「院内教育プログラム」、そして「研究指導方法論」を出版できました。研究成果を活用可能にするために何ができるのかと考えた結果です。

■また、その結果、予想もしないことが起きました。それは、私が産出した研究が海外の研究者の目に触れ、米国の南フロリダ大学、中国黒竜江省の哈爾濱医科大学、そして、タイのチェンマイ大学との共同研究が実現したことです。既に複数の研究成果が産出されています。

■大学教員には4つの重要な仕事があります。それは、教育、研究、社会貢献、そして大学の組織運営です。私にとって研究はこの4つの仕事の一部であり、一人でも多くの患者が、優れた看護を提供してくれる看護師に出会ってほしい、また、看護という仕事を選択し、看護学を学ぶ学生達が優れた教育を受けてほしいとは願っていましたが、海外の研究者と共同研究をすることは、考えてもいないことでした。研究は、そんな私を海外に頻繁に引き出してくれるようになりました。



***研究が国境を越えるとき**

どのような研究がどのように国境を越えたのか、また、国境を越えた研究がどのような条件を備えていたのかを、哈爾濱医科大学との共同研究を例にとり、具体的に紹介がありました。また、舟島先生を「未知の世界に連れて行った」説明を聞き納得できました。

■平成 20 年 1 月に届いた中国から 1 通の手紙が届きました。差出人は哈爾濱医科大学の教授であり、全く面識のない方でした。手紙の内容は、大学院生、教員を対象とした講演の依頼と「看護実践・教育のための測定用具ファイル」に掲載されている授業過程評価スケールの使用許諾です。偶然に私の著書を手に入れて、その使用許諾とともに、この研究をしている私に、大学院生、教員を対象とした講演を要請する切なる思いが綴られていました。ここから哈爾濱医科大学との交流が始まりました。

■平成 20 年 3 月第 1 回訪問。手紙を受け取った 2 か月後、講演「日本の看護職養成教育の現状と課題」と共同研究「授業過程評価の日中比較」の打ち合わせを目的とし、数日間滞在しました。この研究の成果は、平成 21 年に北京で開かれた日中看護学会で発表できました。

■平成 21 年 8 月第 2 回訪問。共同研究「授業過程評価スケール中国語版の開発」の打ち合わせを行いました。その過程で、中国の学生には中国独自の授業に対する評価基準があることが分かり、それを解明してスケールを開発すれば授業改善に向け一層役に立つだろうと、私と教授は合意しました。

■平成 22 年 8 月第 3 回訪問。依頼していた学生 500 人のデータ収集は終了していました。けれども、質的研究を指導できる研究者がいないため、分析は壁にぶつかっていました。解決方法を協議した結果、その場で私が分析方法を指導することにしました。そして、日本の研究者も中国のデータを分析し、それをもとに共同分析をすることの提案をしました。

■平成 23 年 5 月第 4 回訪問。哈爾濱医科大学看護学部 10 周年記念に客員教授として招聘され、記念講演をしました。それとともに、共同研究、データの日本語訳の妥当性の確認をしました。

■平成 23 年 6 月第 5 回訪問。この質的データを分析するためには、中国の学生たちの授業の状況を知って、自由記述内容を理解する必要があります。データを理解するために、中国の授業を参加観察しました。中国と日本の政治の状況は異なり、教育機関の中の中まで入っていくというのは、大変、難しいことです。でも、私たちは研究上必要だという理由から、日本人が実際に入っていくような奥の奥まで入っていくことになってしまいました。

■平成 23 年 8 月第 6 回、5 月第 7 回訪問。この時は、日本側の分析結果と中国側の分析結果を合わせて日中共同分析をしました。短期間での 7 回の訪問により、大学近辺のこともよくわかるようになりました。不安もなくなり、和気藹々と分析ができるようになりました。

■1 昨年、授業過程評価スケール中国語版の信頼性・妥当性は確認でき、中国で書籍として出版されました。私の関わった研究成果が中国で書籍になるなどということは考えてみなかったことです。

■日本の大学には多くの中国人学生が留学してきており、今後、日本の教員が中国人学生を含む授業を担当するとき、このスケールを使用して、中国人学生から評価を受け、授業改善に役立てたいと思っています。それにより、中国人留学生にも満足する授業を提供できるようになると考えています。このように研究はどんどん私を未知の世界に連れていって来ています。

■現在の共同研究は、中国の病院の看護師の医療事故防止対策に関する研究や、日本で開発した何種類かの尺度の中国版の開発です。研究はずっと続いて国境を越え発展し続けています。

■大学に求められている国際化、グローバル化に適合する状況を大学に繰り広げているだけ

ではなく、研究を介して国境を超えた信頼関係が形成されることが重要です。

舟島先生は、「学生時代は、広い視野を持っていて、将来、世界に飛び出していきたいなんてことを思っていた学生ではなかった。けれども研究がどこまでも引っ張ってくれた。中国やその他の国と共同研究をしようなんてことも思ってなかった。」と話されました。また、「研究を活用可能な形にしようと思って書籍としたことを契機とし、共同研究が始まり、開発したスケールが中国の教員の教授能力を高めることに繋がり、既に研究結果でその成果が明らかになっている。」と話されました。

研究はずっと続き、国境を越え発展し続けていることが理解できました。

*偶然・幸運・たまたま

まとめとして、この一連の研究が舟島先生の予想をはるかに越え、なぜ国境を越え、それにとどまらず発展し続けているのかを整理してみると、「偶然、幸運、たまたま」なんだと話されました。この、「偶然、幸運、たまたま」が何故、起きたか、次の講演がありました。

■「あるがままの状態から目をそらすことなく、その本質を取り出す」ための研究を行ったことにより、この「偶然、幸運、たまたま」が起きていると思います。哈爾濱医科大学の教授が私の開発したスケールを使用したいと思いそれを行動に移すエネルギーは、教員が頭の中で考えて作成したスケールではなく、日本の学生からデータをとって、それを分析して質問項目をつくったところにあると思います。

■何か一つのことをやるときに、ほかのものを非難する人がいますが、私は人が行っていることは必ず意味があると思っています。既存の研究を知った上で、この研究を実施しているのです。私は「先人の知見に最大限学ぶ」という姿勢を大事にしていたから、それが中国で受け入れられたと思っています。また、日本の学生からどのような授業過程が良

いのかをデータ収集して、分析しただけでは使用可能にはなりません。それをスケールにして本に出版できた、すなわち「研究を活用可能などころまでやり続けた」というところが、この「偶然、幸運、たまたま」を引き起こしたのだらうと思っています。

また、この「偶然、幸運、たまたま」が1回で終わらずに、もう十何年継続している、その理由として、次の講演がありました。

■第1は、哈爾濱医科大学の大学院生や教員と、役割の異なる対等な関係にある共同研究者として誠実に交流していくということです。私と同行する共同研究者は、このことを念頭に置き、中国の共同研究者と誠実に交流する必要性を再確認しつつ訪問回数を重ねてきました。

■第2は、中国には三千年の歴史があり、その中には第2次世界大戦という事実があることから目をそらさないということです。これまで日中関係が悪化し何回か渡航を中止したこともありました。そのような状況があっても、私たちはどんなことがあっても友人であり、共同研究者であることを確認しつつ、交流を継続しています。

■第3は、中国の政治文化には精通していないことを念頭に行動するということです。何度も訪問を重ねますと、緊張感は薄れてきます。しかし、哈爾濱は同じアジアの国ですが、国情は全く異なり、緊張感を持って滞在することを心がけています。このことが「偶然、幸運、たまたま」を現在もなお発展し続けいく関係につながっていると私は信じています。

最後に、舟島先生から、島根県、そして、日本のリーダーとして活躍していくためには研究は必要であり、ぜひ皆さんも状況が許し、大学院に進学したいと思う方は、ストレートでの進学していただきたいと、エールを頂きました。

また、学生からは「研究に対する強い熱意が大切」「研究をすることで、看護という仕事やその分野について深く知ることができる」「自

分の興味のある分野は進んで挑戦いくことが大切」など、自身のこととして前向きな感想がありました。

島根県立大学出雲キャンパスでは、これから期待される学生とともに、豊かな教育・研究活動を展開していきたいと切に思いました。

舟島なをみ先生に厚くお礼申し上げます。

